

勤務医部会だより

ポストコロナにおける環境問題



幹事 田中守嗣
(刈谷豊田総合病院 病院長)

3年たってようやく出口が見えてきた感のあるCOVID-19。病理学の父R. Virchowはヒトに感染する動物の病気を「zoonosis[zoon(動物の)-osis(病気)]」としました。ご存知のようにCOVID-19も動物由来感染症といわれています。人の感染症の約60～70%は、動物由来感染症と考えられています。近年では交通機関や物流の向上により、短時間で大量の人や物さらにはペット用生物などの移動が可能となっており、動物由来感染症を含めた様々な感染症が国境を越えて拡がる機会は増大しています。生物多様性が豊かな生態系、すなわち生息する野生生物の種数が多い場所では、動物由来感染症の広がる力が薄まる「希釈効果」というものが発揮されるそうです。実際、さまざまな動物由来感染症について、この「希釈効果」とのかかわりが報告されています。生物多様性が低下すると、人との距離が近くなり、動物由来感染症のリスクが高まると言われています。生物の種類が少なれば少ないほど、住処を失ったウイルスなどの病原体が、早く人に引っ越してくるというイメージが浮かびます。次のパンデミックを防ぐためにも、今、改めて生物多様性の重要性が見直されています。世界で起きている環境問題には、地球温暖化、海洋汚染、水質汚染、大気汚染、森林破壊、生物多様性の減少などが挙げられています。極論すれば資本主義の拡大がすべての原因といえるかもしれません。生物多様性の減少は、森林破壊などで生存場所がなくなることで急激に進行しています。WWFは2020年9月に、世界の生物多様性の豊かさが、この50年間で68%も減少したことを報告しました。

多くの識者が、ポストコロナの環境問題に言及しています。ある人は、コロナ時代に我々人間がどう生きていくべきかを、環境破壊と新型ウイルス拡大の関係について以下のように述べています。「人間

は森林を大規模に破壊し、生活圏をこれまで踏み込んだことのなかった場所まで広げた。動物はどんどん絶滅し、その腸に生息していたウイルスは別のどこかへの引っ越しを余儀なくされている。ほんの少し前まで本来の生息地でのんびりやっていたウイルスたちは、新たな宿主として人間に目をつけている。これに伴い新しい病原体と接触する可能性が高まった。人間は数を増やし続けている。しかも、グローバルに移動し、多くの人と接触し続ける。これほど理想的な引っ越し先はないはずだ。

ウイルスは、環境破壊によって難民化している。これは我々が彼らを巣から引っ張り出しているのであり、ウイルスに責任はない。コロナウイルスが終息しても、次々と別のウイルスの引っ越しが起こる可能性があるのでウイルス問題は終息しない。今回の感染症以上のパンデミックが、何度もやってくるかもしれないのだ。ポストコロナに考えるべきことは環境問題にほかならない。」と。

またもう一人も、人間の環境破壊が未知のウイルスとの接触機会を増やしたことを指摘しています。そして、資本主義、特に環境破壊を続ける資本主義的アグリビジネスこそが危機の確率を飛躍的に増大させていると以下のように述べています。「経営者たちは、世界中で原生林の破壊と乱開発を繰り返している。そして、単一の家畜を過密状態で飼育する。ウイルスは新たな生息地を見つけ、伝染し、進化していく。環境破壊を続ける資本主義的アグリビジネスをやめることしか、根本的解決策は存在しない。」と。

我々は、生物多様性の希釈効果の脆弱化、つまり生物との距離がなくなることにより、COVID-19という大きな代償を受けているといえるのではないのでしょうか？ 生物多様性を破壊しては、再び新たな感染症を呼び起こすかもしれません。彼らの言うことは確かにもっともです。しかし長年続いた資本主義の流れを変えるのは非常に難しいと思われます。ただ、今、地球規模で本当に真剣に考えなければならぬ状況にあることは間違いないのではないのでしょうか？